

牛久：学校周辺に見る自然

第54号

牛久二小

2021年2月1日発行

＜ 冬の生きもの観察 ～①昆虫・クモ＞

冬休みも明けて1月20日、陽射しはあるものの気温4℃のなか、牛久二小4年生と校庭の生きもの観察をしました。「動物や植物たちが、どうやって冬の寒さや乾燥に耐えているか」がテーマです。いつものように、観察ビンゴを手に、元気よく探しまわりましたね。今回は、まず昆虫とクモについて。



ハラビロカマキリの古い卵のう(左上)と、シャリンバイの枝に産まれたオオカマキリの卵のう(右上)。ドウダンツツジの枝にもオオカマキリの卵のう(下)。

カマキリのなかまは、卵で冬を越します。さっそく見つけた卵のうはハラビロカマキリのものでしたが、すでにふ化した古いもののように見えた。ところがその数秒後、すぐ近くのシャリンバイの枝先にオオカマキリの卵のうを見つけました。少し離れたドウダンツツジの枝にもありましたね。

グランドとの境目のフェンス沿いには、けっこう付いていました。



校舎の外壁に付いていた、ハラビロカマキリの卵のう。

新しいハラビロカマキリの卵のうがないかと探しましたが、なかなか見つかりませんでしたね。ところが何と、こんなところに。校舎の外壁の雨がかかりにくいところに、いくつも付いていました。



ドロバチ科のなかま、トックリバチの巣(上2枚)とスズバチの巣(下2枚)。穴があいているのは、すでに羽化したあと。

焼きもののつぼのような形の、泥でかためた小さな巣がありました。トックリバチの巣です。せまいすきまに作られていて確認できませんが、左上のは昨年からあるのでたぶん空でしょう。下の2枚は同じくドロバチ科のなかま、スズバチの巣と思います。穴があいているのは羽化したあとで、これらもたぶん空でしょう。ドロバチのなかまは、イモムシなどに麻酔をかけて泥で作った巣の中に入れ、卵を産んでふたをするそうです。ふ化した幼虫はその中でイモムシなどを食べて育ち、やがてさなぎになり、羽化して出てくるのだそうです。スズバチは幼虫で、トックリバチは前蛹で越冬するようです。



倉庫の屋根のすきまには、アシナガバチの巣がありました。アシナガバチのなかまは、女王だけが朽木の樹皮の下などで越冬し、他のハチはすべて冬までに死んでしまうので、巣はふつうからっぽになっています。が、ときどき巣にとどまって冬を越す女王もいるそうです。動きはにぶいでしょうが、刺されないように気をつけましょう。

アシナガバチの巣。女王だけが朽木で越冬し、ふつう巣は空になる。



掘った土が一輪車にまとめられていて、その中に幼虫を見つけた子もいましたね。甲虫のなかまですが、夏にいたアオドウガネでしょうか？ 興味ある子は、調べてみましょう。また、観察後は、元どおりに土の中に戻してあげましょうね

掘られた土の中にいた、甲虫類の幼虫。



ヨコヅナサシガメ 幼虫の集団越冬。桜の幹のくぼみにいた。

こちらは、たびたび登場するヨコヅナサシガメです。幹のくぼみに、幼虫がたくさんかたまって冬越ししています。一頭では寒さに耐えられなくても、くぼみにたくさんでかたまれば、何とかなるのかもしれませんがね。耐えきれなかったのか、幹の下で死んでいる？ものもいました。



倉庫のすきまや、ビオトープにあるあずま屋の柱や屋根裏などには、いろいろな種類のミノムシが付いていました。中には幼虫が入っているようですが、ずいぶんと古いものもあり、羽化したあとかなり長く残っているようですね。

イチョウの樹皮には、ヒネグロミノガのみの(左)と、ミノガのみの(右)。

ラタグモの巣がありました。家の外壁などにも、よく見られるクモです。成虫で冬を越すようです。その他、変わったところでは、シロダモの葉の虫こぶも見られました。虫こぶの中では、シロダモタマバエというハエの幼虫が越冬しているのですよ。【理科支援員：宮内】



ヒラタグモの巣(左)と、シロダモハコブフシ(右：シロダモタマバエによる虫こぶ)。